

令和元年6月21日現在

機関番号：32677

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07155

研究課題名(和文) 第一次世界大戦後の国際人道活動アクターの組織化と専門化 赤十字国際委員会を中心に

研究課題名(英文) Organization and professionalization of humanitarian actors in the aftermath of the First World War: the example of the ICRC

研究代表者

館 葉月 (Tate, Hazuki)

武蔵大学・人文学部・専任講師

研究者番号：50803102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：第一次世界大戦という未曾有の出来事は、社会・政治・文化のさまざまな面で大きな転換を促したが、その一つとして、国際人道活動が戦時中から活発化し、戦後に質・量ともにさらに拡大した点が挙げられる。本研究課題では、赤十字国際委員会を例に、とりわけその組織化と専門化の過程を多様な史料を用いて検討し、国際人道活動が戦時の経験をいかに振り返りつつ、戦後世界においてどのように発展・変容したのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、現代の人道活動へと連なる20世紀前半の「近代的人道活動」の萌芽について赤十字国際委員会の組織化と専門化の過程を検証した。さらに国境を越えて活動する個々人のプロフィールに光を当て、そのネットワークを歴史的に再構築したことで、グローバル人材の育成を目指す現代の日本社会に示唆を与えることができ、社会的意義があるものと考えられる。また、非国家組織やその構成員が国際社会の主体としていかに組み込まれたのかを明らかにすることで、従来の国際関係史の方法論的刷新を試み、トランスナショナル・ヒストリーの手法による新たな歴史像を提供した。

研究成果の概要(英文)：The First World War, which was a huge catastrophe for the whole world, led various transformations in social, political and cultural level, including that of international humanitarian activities. The latter became highly active during the war, and expanded furthermore in both quantitative and qualitative terms in the aftermath of the conflict. This research project analysed the activities of the International Committee of the Red Cross, and especially its organisation and professionalisation, in order to explore how experiences during the war contributed to the development of post-war international humanitarian activities.

研究分野：国際関係史

キーワード：赤十字国際委員会 国際法 第一次世界大戦 戦争捕虜 難民 国際連盟 ジュネーブ条約 ヴェルサイユ条約

## 1. 研究開始当初の背景

国際人道活動は、20 世紀後半以降の現代的問題として、政治学・法学・国際関係学の分野で研究されてきたが、1990 年代後半、その歴史的進展にも目が向けられ始めた (Ph. Ryfman, *La question humanitaire*, Paris, 1999)。政治的・軍事的諸変動の犠牲者に対する救援活動の歴史的分析は、従来の政府間関係に加えて、国際組織や非政府組織などを新たな外交主体として取り込み、赤十字や YMCA など国際的ネットワークを持つ民間組織の役割に光が当てられた (例えば、D. Kévonain, *Réfugiés et diplomatie humanitaire*, Paris : Publication de la Sorbonne, 2004.)。そうした研究成果を受け、ブリュノ・カバンヌは 2014 年の著作で、第一次世界大戦を契機として、それ以前からヨーロッパに存在した慈善活動が、科学や専門知識を動員し国際化した近代的人道活動へと転換したと、論じている (B. Cabanes, *The Great War and the Origins of Humanitarianism, 1918-1924*, Cambridge : Cambridge University Press, 2014.)。近年では、人・モノ・知識・技術の国境を越えた循環に着眼したトランスナショナル・ヒストリーの手法が国際人道活動史にも積極的に取り入れられている。たとえば、グローバル・ヒストリーの隆盛に竿差すフランスの歴史雑誌 *Monde(s) : histoire, espaces, relations* の 2014 年 6 号の特集号は、*Philanthropies transnationales* (トランスナショナルな慈善) であった。その中で、国家の働きや影響力を無視すべきではないとする点、人道組織を中立的・非政治的団体と捉えるのではなく、そこに植民地主義やナショナリズムがいかに表れたかに着目する点など、より批判的な視座を持った人道活動史研究が進められるようになった。日本国内でも、日本赤十字社に関する研究成果 (黒沢文貴・河合利修編『日本赤十字社と人道援助』、東京大学出版会、2009 年)のほか、アメリカ・ヨーロッパ史分野では若手研究者による成果がこの数年で発表されている (五十嵐元道『支配する人道主義 植民地統治から平和構築まで』(岩波書店、2016 年)及び大澤広晃や牧田義也の研究など)。ただし、英語圏を対象とする研究に偏っている点、歴史を扱っていても政治学や法学の専門家による理論分析が多い点から、実証的かつ批判的な歴史研究を赤十字国際委員会が本部を置くフランス語圏を含む幅広い地域を対象に今後進めていく必要があると研究遂行者は考えた。

## 2. 研究の目的

「近代的人道活動」(上述カバンヌ 2014) をより多面的に解明するためには、赤十字国際委員会の組織戦略や個別アクターについて社会史的・文化史的視座から検討していく必要があった。第一次世界大戦後は、従来の活動の不足点や今後の展望が議論されはじめ、人道活動の枠組みの整備が急務とされたと同時に、戦後も続いた様々な政情不安や紛争の犠牲者救援のために迅速な現場対応が求められた、組織にとっての過渡期である。赤十字国際委員会という国際的な非国家アクターが、内部の組織化と専門化をいかにして進めたかを、外部との関係性に目を配りつつ実証的に分析することによって、20 世紀前半の国際社会の多層性の解明を試みた。

## 3. 研究の方法

本研究は、1)1920 年代の国際会議や規約の設定を通して赤十字国際委員会がいかに組織化されたかを、国際政治の中に位置づけマクロなレベルで分析すること【赤十字国際委員会の組織化の検討】、2)同時期に人道危機解決のために派遣された調査団の活動内容や個々人の働きを通して、人道活動の専門化がいかに進められたかをミクロなレベルで検討すること【人道活動の専門化の検討】、の二方向で実施された。史料に関しては、赤十字国際委員会(ジュネーブ)の史料を、同委員会と関係が深かった政府関係者や国際法学者の史料を持つスイス・フランス・アメリカ合衆国の国立文書館、並びに他の人道組織の関連史料と照らし合わせるという、マルチアーキヴァルな手法を取り、多角的分析を進めることにした。実際には、2018 年 2 月に 3 週間のフランス国立文書館・国立図書館、ジュネーブの赤十字国際委員会史料室での史料調査、2019 年 2 月に 3 週間のフランス国立図書館、外務省文書館での史料調査を行った。

## 4. 研究成果

### 赤十字国際委員会の組織化の検討に関連する成果

赤十字国際委員会は終戦直後から、死者・傷病者だけでなく軍人捕虜・民間人収容者など多様な戦争犠牲者を生み出した大戦の経験から、19 世紀に定められた国際法では現状の人道危機の解決には不十分であること、赤十字の活動を拡大する必要があることを認識していた。したがって、1920 年代の赤十字国際会議や同委員会が参加した外交会議で、赤十字運動の今後の方向性や各組織間での役割分担がいかに検討されたのかを検証をおこなった。とりわけ、大戦以降に新しく人道活動の救援対象者となったカテゴリーに関して国際法上の保護が話し合われたが、どのような基準で彼らは分類・定義されたのか、どういったカテゴリーが議論の俎上に乗りにやすく、あるいはどのカテゴリーの犠牲者の保護が看過されがちであったのか、という点に

関し、準備委員会や国際会議の議事録並びに法学者による注釈を用いて分析した。その成果は、1929年に制定された捕虜法典に光を当てる形で、口頭報告と論文で発表した。【雑誌論文、学会発表】

さらに、赤十字国際委員会が、国際連盟やほかの人道組織（日本赤十字社、アメリカ赤十字社、YMCAなど）とどのような関係にあるか、赤十字国際委員会の活動を赤十字運動全体の中にどのように位置づけるかについては、2019年ポルトガルで予定されている学会で報告予定である。【学会発表】

また、赤十字国際委員会が現地調査団派遣や国際法制定/改正のための動きを活発化するきっかけとなった第一次世界大戦及びその直後の人道的危機の状況について、とりわけロシアをめぐる国際情勢を中心に論じた。【雑誌論文、学会発表】

#### 人道活動の専門化の検討に関連する成果

申請者は、海外特別研究員（2015-2017）としてのジュネーブ滞在時に、1919年から1923年にかけて戦争捕虜の帰還を実施するために赤十字国際委員会が派遣した調査団に関する史料群の所在を全て確認し、写真に収めることができた。本研究計画では、150箱に及ぶこの史料群 ACICR-MIS の詳しい検討を開始した。史料はドイツや東欧諸国を中心とした10カ国以上での調査団の報告書を含み、派遣人員の選抜・派遣先での労働条件・調査団の運営状況・現地での外交交渉・他組織との関係など人道活動の実態について分析を進めた。また、調査団に雇われた個人の前後のキャリア、具体的活動、適性などを辿ることで人道活動に身を投じた個々の軌跡をこれらの史料から抽出することを試みた。【学会報告、図書】

研究計画はおおむね順調に進んだが、この観点からの検討については、達成できなかった部分もある。2019年2月にアメリカ・スタンフォード大学のフーヴァー・インスティテュートで、1920年代にアメリカがヨーロッパで行った人道活動に関する史料を調査する予定だったが、同組織の資料室が2018年末より1年間改築のため閉鎖となったため、予定していた調査を本研究計画期間内に遂行することができなかった。また上述したMISの史料は非常に量が多いため、すべての閲覧を本研究機関内に終えることはできなかったため、本史料群に基づく最終的な成果報告までにはもう少し時間をかけたい。

そのほか、この研究で得た知見・方法論を活かし、歴史学の方法論に関わる議論への参加や、大学生向けのフランス史の教科書の分担執筆などを行った。【雑誌論文、学会発表、図書】

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Hazuki Tate, « Le Comité international de la Croix-Rouge comme architecte du droit international : vers le Code des prisonniers de guerre (1929) », *monde(s) histoire espaces relations*, no.12, 2017-11, 203-220. (査読あり)

書評 館葉月「安井教浩著『リガ条約 交錯するポーランド国境』(群像社、2017年)」『東欧史研究』41号、2019年、99-102頁。(依頼あり)

書評 館葉月「クリストファー・クラーク(小原淳訳)『夢遊病者たち：第一次世界大戦はいかにして始まったか』(みすず書房、2017年)」『現代史研究』64号、2018年、43-49頁。(依頼あり)

書評 館葉月「木畑和子著『ユダヤ人児童の亡命と東ドイツへの帰還』」『西洋史学』263号、2017年、76-78頁。

〔学会発表〕(計 8 件)

Hazuki Tate, “Cooperation and competition between the League of Nations and the Red Cross Movement in their first humanitarian activities in the post-war world”, 国際シンポジウム A Century of Internationalisms: The Promise and Legacies of the League of Nations (於ポルトガル・リスボン新大学、2019年9月20日予定)(事前審査あり)

館葉月「合評会：安井教浩著『リガ条約 交錯するポーランド国境』(群像社、2017年)」東欧史研究会、2018年9月8日(招待有り)

Hazuki Tate « De Sur la « crise » de l'histoire à Chocolat : la réception des travaux de Gérard Noiriel au Japon » 国際シンポジウム Héritages et actualités de la socio-histoire Colloque international autour des travaux de Gérard Noiriel (於フランス・EHESS) 2018年6月15日(招待有り)

館葉月「世界大戦後の「ロシア問題」と人の移動：東部戦線の戦争捕虜帰還に着目して」第115回史学会大会公開シンポジウム「ロシア革命と20世紀」(於東京大学) 2017年11月11日(招待有り)

Hazuki Tate, "Internment after the end of the war: «Humanitarian camps» in the process of POW repatriation, 1918-1923" 国際ワークショップ Military and Civilian Internment in World War I Differential Treatment, Its Motives and Long-Term Implications(於イスラエル・テルアビブ大学)、2017年10月19日(事前審査あり)

Hazuki Tate «Long Process of Repatriating POWs after the First World War: Challenges of the International Committee of the Red Cross» Political Economy Tokyo Seminar (PoETS)(於東京大学) 2017年7月27日(招待有り)

館葉月(ディスカッサント)ジェラルド・ノワリエル講演「歴史の社会的機能」日仏会館講演会、2017年6月13日(招待有り)

館葉月「捕虜法典の制定へ向けて：1920年代の赤十字国際委員会と国際法学者の取り組み」西洋史学会第67回大会(於一橋大学) 2017年5月21日(事前審査あり)

〔図書〕(計 2 件)

Hazuki Tate "Internment after the war's end "Humanitarian camps" in the POW repatriation process, 1918-1923" in Iris Rachamimov and Rotem Kowner (eds) *Military and Civilian Internment in World War I: Local, National, and Global Perspectives*, Oxford: OUP, forthcoming (paper submitted)

館葉月「大戦から大戦へ 変動する世界とフランス社会」(南祐三と共著、前半担当)『大学で学ぶフランス史』(平野千果子編、ミネルヴァ書房、2019年)(初稿戻し済み)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
<https://researchmap.jp/hazukitate/>

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。